

(4) - 阪神大震災体験者の声

緑地遊歩道網の整備を

今回の地震で、緊急時のわれわれ住民のとりあえずの避難のための交通手段としての徒歩、さらに自転車の重要性を再確認させられた。そこで避難通路さらには復旧時の各種の緊急物資搬送のために緑地遊歩道網を整備することの価値が考えられる。一段の道路は倒壊した家屋や電柱・電線がその行く手を阻んだり、また、往來する自動車との混在で震災時の避難路としては極めて危険である。特に地震後大規模な火災が発生した場合には、交通渋滞により道路上を埋めつくした自動車によって、延焼が広がる可能性も考えられる。

そこで、市街地に避難場所としても活用できる緑地公園を整備するとともに、それらを緑地遊歩道網で結ぶ考え方である。

またこの緑地遊歩道網に自転車道も併設することで、復旧時の飲食物品、医薬品その他の物資運搬がある程度可能になる。緑地公園はまた避難のスペースとして利用されることになり、住民はそこで飲食物品などを受けとることができるであろう。超密集した昔からの市街地の復興にあたって、今後整備されることになるであろうところの拡幅された「道路空間」の一部をこの様な形で整備することは如可なものか。空間にゆとりがあれば、緊急車の通行も処理できるかも知れない。

この緑地遊歩道が、平常時には地域のアメニティー・スペースとして利用できることは言うまでもない。地域にとっても緑地遊歩道は絶好の市街地散策の遊歩道となり、例えば観光面での効果も期待される。

また将来的にはこれら遊歩道を自転車にて通勤・通学する人が増えることで、道路交通渋滞の緩和にも貢献できるものと期待される。

(吹田市 今市隆之 会社員 61歳)

緑の大木は人の生命を守る

それは、ある日突如として私達に降りかかった災難、いや試練と言うべきかもしれない。そして、突如というのも人間の楽観的な言い訳で、異常気象、米不足、水不足と、さしそまる事へのヒントは隠されていたのかもしれない。それを見落として、経済成長やバブルにうつつをぬかし個人の利益だけを尊んだ結果、建ち並ぶビル群は幅をきかせていった。高層ビルの陰で小さくなっている神社、緑化運動で申し訳程度に植えられたプランターのバンジー。人間はコンクリートと緑を、街と保養地、闘う場所と休養する場所に区別してしまった。自分達の都合で強引に。

英語の“Weather”という単語は本来は「嵐」という意味で、大陸に住む人の一番恐れるものは自然。その日がfineなら、神に感謝すべきだと言う。それに比べ、日本で言うところの“天気”とは、英語と相反して「晴天」を意味する。晴天が当然であるかのように。

日本が地震国だということは、今初めて判明した訳ではなく、少なくとも数十年に一度は、どこかの場所が犠牲となっている。「明日にでも自分が経験するかもしれない」と阪神大震災以後、日本中の人が実感したに違いない。地球が生きて活動している以上、そして人間はそのちっぽけな住人である以上、この際もう一度古人を見習い、自然と共生、時には譲歩の道を歩むべきだと思う。

昔、神社に大きな木があった。守り神として祭られた木を、子供の頃に見上げていた。木の肌を触ると不思議に心が落ち着いてた。あの木の根は地下何キロに及んでいただろう。木の根は地下を包み込み、地震から私達を守ってくれるのではないか。

それにしても阪神大震災の被害は大きく、科学の力など自然にはかなわなかった。ならば、自然に自然で緑に協力してもらい、地震を忌み嫌うのでなく、揺れをいかに緩和するか。私達の運命を左右する鍵は、緑の木々が握っているような気がする。

(天理市 鉄川昌美 主婦 33歳)

生き残った街路樹

阪神大震災から約3週間後、フェリーで神戸に向かった。

思っていたほどひどくない、と、最初少しほっとしたのは、街の背後に屏風のように広がる六甲山系が、2月初旬の寒さにもかかわらず美しい深緑を保っていたせいだ。神戸で生まれ育った私も、瀬戸内海からこの街を望むのはこれが初めてで、今さらのように緑に包まれた故郷が誇らしかった。しかし、接岸間近になってくると、多くの家々の屋根にビニールシートがかぶさり、その不自然な青色が異常事態を告げていた……。

震災直後、実家との電話が通じなかった時、私は色々な不安に苛まれたのだが、ひとつには、かなり急な坂に建っている家の石垣が壊れて古い木造の建物が傾いているのではないかとということ、そして次には、すぐ裏手にそびえる摩耶山が崩れてきているのではないかと、ということだった。

やっと繋がった電話で、母は、自分と父は家が無事だったことを伝え、こうつけたした。「何十年の間、庭の木が地面の中に根を張って石垣と絡まっているからね。それと、摩耶山は削っていないから、山の木が土砂崩れを防いだのよ」

青木港から六甲まで歩く道、テレビではわからなかったことを私は発見した。古い木造住宅があまりにも簡単に壊れてしまっているのは、何度も画面の中で見た風景とまったく同じだったのだが、驚いたのは、ベシヤンこになった家の庭の木々や草花が、地震の前と同じように茂り、咲き続けていたことである。また、道路の傍に植えられた一見か細く弱々しそうな街路樹も、あれだけ地面が揺れたことが嘘のように、まっすぐ天をめざして立っていた。

今回の地震で、植物の強さは、実に印象的だった。神戸の復興計画には、忘れずに、緑をこれまで以上に加えてほしい。

(高松市 萩森邦子 主婦 42歳)

出典：造園界 造園家たちの阪神大震災、1995、環境緑化新聞



出典：造園界 造園家たちの阪神大震災、1995、環境緑化新聞